

語尾に「に」を有する古代象徴辭の一問題

朝 山 信 彌

「象徴辭」とは世に所謂「擬音辭」「擬態辭」の總稱に當る。しかし「擬音辭」と「擬態辭」とは、現實の表現言語に際しては常に一本の自明な限界線によつて二者の世界に峻別され得るものではない。ある象徴辭はほぼ純粹に音響的な表象をのみ直觀させ、他のある象徴辭はほぼ純粹に客態的な表象をのみ直觀させるけれど、又象徴辭の中のいくつかは、音響的な表象と客態的な表象とを融合的な、微妙な姿態で一聯の感情の中に同時に喚起せしめるものがある。山家集の

とくとくと落つる岩間の苔清水汲みほすほどもなきすまひかな

の初句は、とくとくと岩間を潜つて流れ出る清澄な清水の擬音であると共に、又チカチカと青苔の中に光つてゆくその美しい水流の擬態である事を忘れてはならぬ。しかもそれらの二個の表象の關係は決して單に相加的な、即ち恣意

的な二個のものの接合による、何處かに縫合線を探索し得る様なそれではなく、搖れ動く感情の表に唯一個の融合的な表象として存在し、その何れの部分が擬音的であり、擬態的であるかについては、當事者の意識の中でも決して容易にそれを決定する事は出来ないのである。いはば、「擬音辭」と「擬態辭」とは同一系列に屬する二個の變相であり、常にその中央線に向つては厚く滲透し、合流しつつあると言ふべきであらう。「擬音辭」「擬態辭」なる語が多く便宜的な用語價値をしか持ち得ないと言ふのはこの意味である。

しかし又「象徴辭」自身もその他の普通語との間に嚴密な境界線を有するものではない。尤も、兩者における音韻の聽覺的效果の有無とか、その音韻形式と意義との聯合の様式が一は心理的必然により、一は社會的必然によるとか、その相異點を觀念的に列擧する事はさして困難ではないかも知れない。けれど、その種種な中間的段階への慎重な考慮を忘れない限り、これらの規準は所謂「程度」の問題にすぎず、本質的な言語性に基づく規準であるとは言へないのである。フランス語で「流れ」を意味する *Fluve* が、一個の唇齒性スピラントと一個の流音とからなる語頭之二重音の爲にその「流れ」に適はしい聽覺的效果(擬音的效果)を有して居るけれど、これは勿論「象徴辭」ではない。又「吊鐘」を意味する *gong* の頭音も一個の重厚な有聲子音と、しめやかな流音とからなり、ついで一個の短母音に續くが爲に、沈痛な悲哀の感情を誘ふに効果的であるけれど、これ又語源的に卑語ラテン語の *classacum* に溯り得る事を想へば、本來的の象徴辭であるとはいへなく。逆に、詩經に、

伐木丁丁。鳥鳴嚶嚶。出自幽谷。遷于喬木。嚶其鳴矣。求其友聲。(小雅・伐木)

とある「丁丁」は古代支那において伐木の象徴辭（擬音辭）であつたが、我々の意識ではさうでなくなつて居る。「氷がつるつるすべる。」は象徴辭であるが、「板を拭いてつるつるになつた。」といふ表現では象徴性はやや稀薄となり、更に禿頭の人を罵つて「あのつるつるが……」といふ時は、象徴性は更に稀薄となつて居ると考へなければならぬ。（尤も現代語では、後二者は前者と力點のおき方が異つて來て居る。）その上、純粹の象徴辭は最高度に感詞的で、現實の言語表現に用ゐられる事は殆ど無く、一般には常にある種の單語として機能する限り、——例へば副詞として機能する事が、國語史を通じて象徴辭が語として活躍する最も大きな領域であつたが——多少とも社會意識における固着性を示さない象徴辭はなく、かくて象徴辭と普通語との交流は、共時面において、通時面において、瞬時も絶えず行はれて居ると考へなければならぬのである。此處において、「象徴辭」なる名稱も、實は多分に便宜的であり、暫定的である。しかしさう言へば、すべて人間の眞理を表現する用語はすべて便宜的な、暫定的なものであり、その語が何故に便宜的であり、暫定的でなければならぬかを深く究明する事が、かへつてその悠遠な眞理への深い省察を意味する場合さへ多いのである。

さて、象徴辭の研究にはいろいろの觀點があり、又それに従つていろいろの方法があるであらう。言語發生に關する問題は別としても、象徴辭における「音性」の究明や、その單語構成の手續等は就中私の興味を引く課題であるけれど、それらの細論は今他日に譲らねばならない。本稿における私の當面の問題は、一種の副詞形成辭とも言ふべき「に」の助辭を有する象徴辭を中心として、古代語における象徴辭の性格を明らかにし、更に出來得べくんば、そ

